

反省している〈私〉は反省によって捉えられるのか

——フッサールにおける自我論の再検討

佐藤大介(岡山大学)

反省している〈私〉は反省によって捉えられるのだろうか。この問いは、フッサール現象学が方法論上答えねばならない問いの一つである。というのも、フッサールは、反省を基本的な方法とし、反省によってありのままの〈私〉を捉えて分析しようとするからである。もし、反省している〈私〉が反省によって捉えられずとすれば、その分析は、反省しているありのままの〈私〉について、未解明な面を残すことになってしまう。

本発表では、フッサールの議論に基づいて、上の問いにイエスと答えることができることを示したい。そのために、次の手順で考察を進める。まず、上の問いにおいて、何が現象学的に論点となるのかを描き出す(1)。次に、『イデーニ I』での「段階性格」に関する議論に着目して、反省している〈私〉の存在がどのようにして非主題的に知られるのかを示す(2)。そして、『内的時間意識の現象学』での「内的意識」に関する議論に着目して、主題的に反省された〈私〉が反省している〈私〉と同一であると、明証的に捉えられることを示す(3)。以下、それぞれの手順の概略を順に示す。

(1) フッサール現象学において〈私〉とは、「意識の主観」を意味し、具体的な何かしらの意識の働きとともに見出されるものである。今まさに働いている意識が捉えられることで、その主観である〈私〉も捉えられるのであり、反省している〈私〉を捉えるためには、まさに反省している意識が捉えられねばならない。

しかし、いくつかの先行研究は、反省している〈私〉を反省によって捉えることはできないと主張している。ザハヴィは『自己意識と他性』(1999年)の中で、〈私〉が機能する主観性である以上、知覚や記述が知覚されるものや記述されるものに属さないように、主題化の過程そのものは主題化される内容に属していないと論じている。つまり、反省している〈私〉は、非主題的地点としてつねに残り続ける。斎藤[志向の臨界]』(2000年)の中で、反省している〈私〉を主題的に捉えるためには、それを主題化する新たな「後からの反省」が必要であるが、この「後からの反省」において捉えられる〈私〉は、まさに反省している〈私〉ではなく、反省された過去の〈私〉であると、論じている。

これらの主張には、次の二点が議論の余地として残されている。

A. 〈まさに反省している〈私〉〉が当の反省において主題化されたものの中に含まれていない」という主張は、まさに反省している〈私〉の存在そのものを否定するものではない。むしろ、上の先行研究は、それが非主題的に存在していることを、積極的に認めている。では、その存在はどのようにして知られるのか。

B. 上の先行研究によれば、反省している〈私〉は「後からの反省」によって主題化されるほかなく、この「後から」という時間的経過が、反省された〈私〉と反省している〈私〉との間に時間的隔たりを生み、これが両者の同一性について正当性を損なわせる。しかし、この時間的隔たりは、必ずそうした正当性を損なわせるのだろうか。

これら二点が順に、(2)(3)での論点となる。

(2) まさに反省している〈私〉の非主題的な存在は、反省において「段階性格」が「注意」されている際に知られる。

フッサールによれば、段階性格とは、主題的に捉えられている

ものが、意識の多重性の中にあることを示すものである。これは、意識作用を新たに主題化する意識の働きを反映している。非主題的な意識が主題化されるためには、それへと新たに主題化する意識の眼差しが向けられねばならない。これにより、その主題化された意識には、まさに働いている意識に対して別の段階にあることを示す性格が付着するのである。

段階性格は、主題化された意識体験が〈まさに今〉働いているものではないことを意味する。田口が『フッサールにおける〈原自我〉の問題』(2010年)の論じたように、そうした否定的な意味は同時に、まさに働いている〈私〉の存在を指し示している。

こうした段階性格は、反省において或る意識体験が主題化されている場合、必ず現れる。すなわち、その場合、その意識体験は主題化する反省的眼差しが振り向けられたものであり、〈まさに今〉働いているものではないものとして現れ出る。

ただし、フッサールによれば、段階性格は、必ずしも顕在的に捉えられているわけではなく、それは「注意」によって顕在的に捉えられる。注意とは、意識によって志向されている内容自体を変えることなく、そこに含まれる性格を顕在化する働きである。

したがって、反省における段階性格が注意されているならば、反省において主題化された〈私〉は反省された〈私〉であって、まさに反省している〈私〉ではないということが捉えられているのであり、この段階性格の意味において、まさに反省している〈私〉の存在が非主題的に気づかれる。このようにして、その存在は知られるのである。

(3) (2)での成果と、内的意識の機能形式に関する議論とを組み合わせれば、反省された〈私〉がまさに反省している〈私〉と同一であることが、明証的に捉えられると見做すことができる。

フッサールによれば、内的意識とは、対象化することなく己自身を意識する自己意識を意味し、これは、〈把持-原印象-予持〉という構造をもつ。この構造は、〈幅のある今〉を捉える意識の機能形式である。意識が働いている場面を具体的にみてみれば、何かが意識されている〈今〉は、決して点のような瞬間的な今ではなく、〈幅のある今〉である。点のような瞬間的な今は、具体的な今から抽象される極限概念にすぎない。今が幅を具えるものとして現れ出することは、〈まさに今〉という時間的位相が原印象として意識されるだけでなく、〈たった今〉という時間的位相が把持され、〈今すぐ〉という時間的位相が予持されるということと、表裏一体の関係にある。把持・原印象・予持は、原初的な時間的差異を保ちながらも、同じ今の意識における構造契機である。

明証性は〈幅のある今〉全体に及ぶのであって、〈把持-原印象-予持〉の構造において捉えられているものは、すべて明証的である。把持に着目して言うと、把持されたものは〈もはや今はないもの〉ではあるが、時間的経過とともに把持の把持へと変様していく中で、〈まさに今〉と連続的つながりを成していれば、明証性の圏域にとどまっている。

上述を踏まえば、反省された〈私〉と反省している〈私〉との間にある時間的隔たりは、両者が同一であることの正当性を必ずしも損なわせるわけではない。まさに反省している〈私〉が非主題的に気づかれるならば、それは内的把持へと移行する。そして、これが同じ〈幅のある今〉の中で主題的に反省されるならば、この反省された〈私〉は、反省している〈私〉との同一性を明証的に保っている。